

元稲荷古墳後方部南西隅角の調査

所 在 京都府向日市向日町北山 64-5 ほか 調査期間 2010(平成22)年1月18日~3月19日(予定)
調査所管 向日市教育委員会 調査機関 財団法人向日市埋蔵文化財センター(担当 梅本康広)
調査協力 向日神社 向日台団地

1 はじめに

元稲荷古墳は3世紀後半につくられた全長約92mの前方後方墳で、初期大和王権に参画しながらも政治経済的に自立した桂川流域を支配拠点に置いた有力な首長の墓と考えられます。

当センターでは向日丘陵古墳群の保存活用を主目的として、2006(平成18)年から後方部に対する範囲内容確認調査をはじめています。過去3年間の成果としては、後方部東側及び北側の遺存状況と墳丘裾位置を確認することができました。今年度は西側を対象にとくに隅角位置を明確にすることを主な目的として後方部西側南端裾から第二段斜面隅角までの範囲に発掘区を設定して調査を実施しています。

2 調査の成果

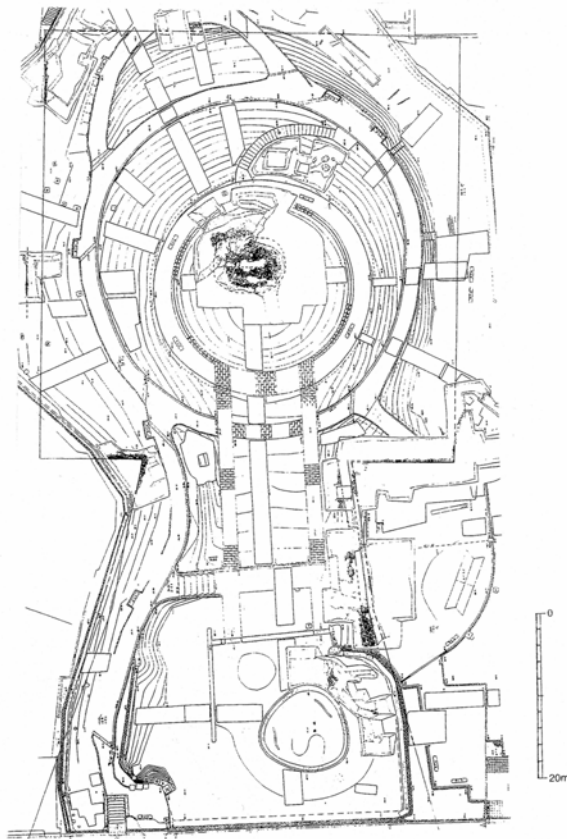
調査の結果、後方部西側南端の基底平坦面、第一段斜面、第一段平坦面、第二段斜面南西側隅角裾までを検出することができました。以下には成果の概要を記述いたします。

基底平坦面 流土の直下からは葺石が転落して集積した礫群が面的に検出されました。転落石の内部からは長岡京期の平瓦が数点出土しました。転落石を除去すると直下にはにびい茶灰色粘質土が検出され、後方部東側くびれ部や後端部で顕著な礫敷は遺存していませんでした。墳丘裾は標高56.30m付近で確認され、後方部南東側の隅角裾付近と比べると西側が0.4mほど高い位置にあることがわかります。

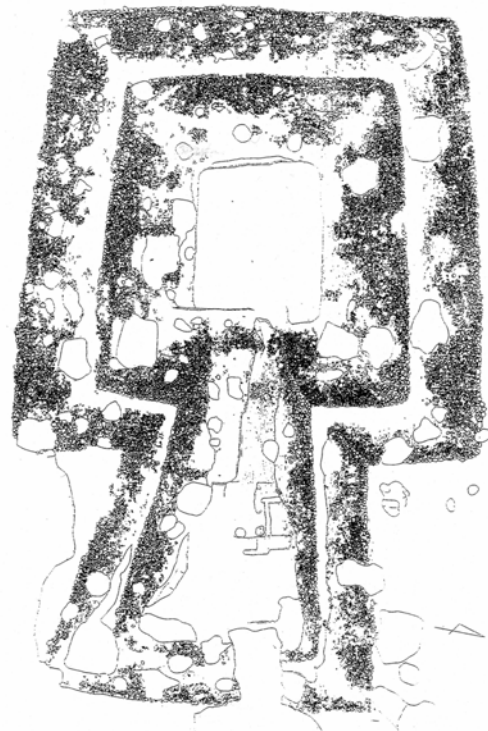
第一段斜面 裾から高さ0.7mまでやや急勾配で立ち上がり、そこから緩斜面に変化します。第一段斜面上半から第一段平坦面にかけては墳丘の一部が崩落しており、斜面長は判然としません。高さは約1.4mあり、後方部後端側が約1.1mであることから、全体的に第一段目は低くつくられています。ちなみに、同じ丘陵上につくられた他の前期古墳では五塚原古墳が後円部後端側で約2.5m、寺戸大塚古墳では後端からくびれ部側に向けて約1.2~2.0mの間を推移するなどの違いがあります。標高57.20m付近までは段丘層を削り出してつくられています。この直上には古墳造営以前に堆積していた旧地表土を削り取り、積み替えて墳丘盛土の第一層にしています。この層は暗茶灰色を呈し弥生時代後期の土器片が含まれています。

第一段平坦面 南側で遺存する平坦面の幅は約1mで、やや南側へ勾配をもたせています。礫敷の一部が遺存しています。西側では礫敷が良好に遺存し、拳大以上の礫を多用して密に敷き詰められています。

第二段斜面 各斜面の葺石は使用石材の大きさと基底石の設置方法に顕著な違いが見られます。南側斜面では長さ0.15mほどの基底石を横置きし、西側斜面では長さ0.2~0.3m大の扁平な面を外側に向けた基底石を縦置きにして列べられています。隅角の葺石は基底石だけが遺存し、南側からの一連の施工によって隅切状に折れ角をつくり西側の基底石につなげられています。稜線上は葺石が失われていたましたが、墳丘の構築に関して急勾配の各斜面裾が隅角では緩やかに勾配を変えていることがわかりました。



1. 神戸市西求女塚古墳（神戸市教育委員会 2004）



2. 石川県鹿西町雨の宮1号墳
（鹿西町教育委員会 1998）

第2図 前期前方後方墳の隅角調査事例（1/800）

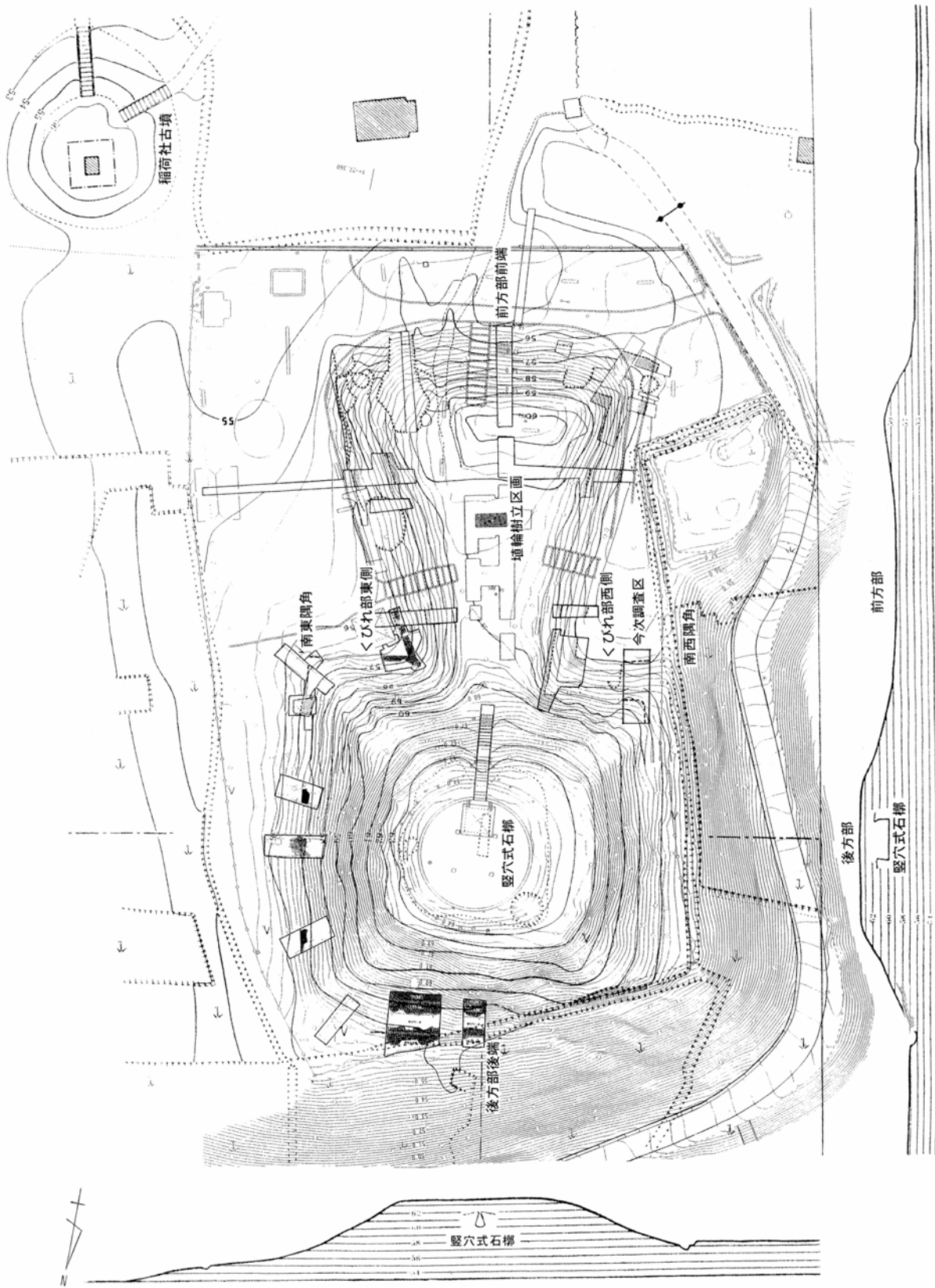
3 調査の意義

元稲荷古墳は前方後円墳が巨大化し定式化した後につくられた大形前方後方墳として最古の一群に属します。当該時期の葺石を備えた前方後方墳で発掘調査が行われた例は少なく、天理市東殿塚古墳（150m）、波多子塚古墳（145m）、下池山古墳（120m）、神戸市西求女塚古墳（98m）、岡山市備前車塚古墳（48m）、都月坂1号墳（33m）、たつの市権現山51号墳（43m）などがある程度です。4世紀代では石川県鹿西町雨の宮1号墳（64m）、犬山市東之宮古墳（67m）などが好例として知られています。

後方部隅角については前方部にも同じことがいえますが、折れ角での基底石の設置方法や稜線上の葺石施工方法がその場所の機能や構築手順を知る上で重要な問題になります。ところが、この地点は葺石の転落や雨水による影響を最も受けやすく、築造当時の状態が遺存する事例はきわめて稀です。

上述した古墳のなかで隅角が確認された希有な事例として、雨の宮1号墳があります。この古墳の場合、折れ角の裾に要となる石を置き稜線上には大振りの石を列べていく方法が採られる一方で、明確な基底石や石列を設けないところもあり、一古墳の中でもその在り方は一様ではありません。

同様なことは今回の調査でも指摘でき、第二段斜面隅角付近の葺石構築の在り方として、南側と西側で石材の使用法に違いがあり、施工にあたった工人集団ごとに構築技術の特徴がはっきりと示されているように思われます。このことはひとつの古墳の葺石施行には、単に技術系譜の差だけでは捉え難い様々な要素が交錯していることをうかがわせます。言い換えれば、画一的な施工法が貫徹されていない状況は工人編成の在り方や施工管理の実態を示唆するものであり、前期古墳の造営集団を解明していく上で鍵となる重要な問題と思われる。



西谷眞治『元稲荷古墳』西谷眞治先生還暦祝賀会 1985年
 近藤喬一都出比呂志「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」
 『史林』第54巻第6号 史学研究会 1971年 をもとに作成

第1図 元稲荷古墳の墳丘測量図・調査区配置図 (1/500)
 (1960・1970年作成の墳丘測量図と合成)

(墳丘形模倣データ)
 全長約92m、後方部長約51m、同北辺幅約51m、同南辺幅約49m、同高約7m、
 前方部長約41m、同高約3m、くひれ部幅約23m、前庭幅約46m